

庫文波岩 / 0

307—308

抄詩董泣

著董泣田薄

店書波岩

(永井製本)

昭和三年四月三十日印
昭和三年五月五日發行
昭和十三年八月十日第十三刷發行

泣菫詩抄★★

定價四十錢

著者

薄田泣菫
すすき た きふ きん

發行者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市神田區美土代町十六番地
島連太郎

岩波文庫
307—308

發行所

東京市神田區
一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話 〇一八七・〇一八八番
九段一三番(小賣部専用)
振替口座東京二六二四〇番

三秀舎印刷

庫 文 波 岩

307—308

抄 詩 堇 泣

著 堇 泣 田 薄



店 書 波 岩

自序

書肆岩波氏の需めにより、岩波文庫の一篇として、ここに私の作詩撰集を出すことになった。

選をするにあたり、私はただ自分の好みにのみしたがって取捨をきめた。紙数が限られてゐるので、暮笛集では尼が紅、二十五絃では雷神の夢、天馳使、十字街頭では葛城の神などの長篇を收容することができなかつたのを遺憾に思ふ。

昭和三年三月

薄田 淳介

目次

目

次

5

「こもり唄」より

自序	三
冬の鳥	一三
つばくら	一三
ほほじろ	一四
猿の喰逃げ	一五
三羽雀	一六
雉	一七
春	一七
こさめ	一八

驢馬と豚	一九
猿の腰かけ	二〇
ひよこ	二一
なつめ	二二
ごろすけ一	二三
ごろすけ二	二三
ほほじろ	二三
お早う	二三
いちご	二四
大笑ひ	二四
つばめ	二五
星と花	二六

「暮笛集」より

うぐひす	二六	兄と妹	四一
猿	二七	大原女	五一
しぐれ	二七	粉屋の女房	五二
狐の嫁入	二八	雛祭	五三
はつかねずみ	二八	秋懷	五四
秋	二九	蟋蟀	五五
夏	二九	鬢の毛	五六
雁と燕	三〇	江戸河にて	五七
		玉腕	五八
		蟋蟀	五九
		夕	六〇
		巖頭にたちて	六一
古鏡拭	三三	春夜	六三
村娘	三五	琵琶湖畔にたちて	六四
暮春の賦	三七	加古河をすぎて	六六
鷓鴣の歌	三九		

揖保川にて……………六

「ゆく春」より

夕暮海邊に立ちて……………	七三
小鼠に與ふ……………	七四
沙彌がうたへる歌……………	七六
小狐……………	七六
罪……………	七九
戀の矢……………	八〇
夏の白晝……………	八一
巖頭沈吟……………	八二
破甕の賦……………	九〇
郭公の賦……………	九二
石彫獅子の賦……………	九四

「二十五絃」より

公孫樹下にたちて……………	一〇一
二月の一夜……………	一〇五
五月の一夜……………	一〇八
翡翠の賦……………	一一一
金剛山の歌……………	一二四
おもひで……………	一二〇
をろの鏡……………	一二三
もぐらもち……………	一二三
澤湯の歌……………	一二四
待ちどころ……………	一二五
海女……………	一二五
紅梅……………	一二六

「白羊宮」より

ああ大和にしあらましかば	一二九
ひとづま	一三三
わがゆく海	一三六
鵜の歌	一三九
望郷の歌	一四四
金星草の歌	一四八
日ざかり	一五二
鳩の淨め	一五四
時のつぐのひ	一五五
をとのどころ	一五六
忘れぬまみ	一五七
離別	一五八
香のささやき	一五九

美き名	一六〇
牧のおもひで	一六〇
くちづけ	一六一
大葉黄すみれ	一六一
無花果	一六二
寂寥	一六二
海のおもひで	一六三
はこやなぎ	一六四
難波うばら	一六五
白すみれ	一六六
樹の間のまぼろし	一六七
片かづら	一六八
枯薔薇	一六九
夏の朝	一七〇
さざめ雪	一七一

「十字街頭」より

睡蓮の歌	一七三
海のほとりにて	一七四
わかれ	一七五
聖心	一七六

街頭	一九七
膾炙膾炙	一九九

落穂拾ひ	一七九
蛸 螭	一八〇
蠹	一八二
爐中の人	一八四
禍の鷺脚	一八六
臨終	一八九
海賊の歌	一九一
つむじ風	一九五

「こもり唄」より（明治四十一年）

冬の鳥

雪の降る日に柊の
 あかい木の實がたべたさに、
 柊の葉ではじかれて、
 ひよんな顔する冬の鳥、
 泣くにや泣かれず、笑ふにも、
 ええなんとせう、冬の鳥。

つばくら

紺の法被^{はっぴ}に白ぱつち、
 いきな姿のつばくらさん、
 お前が來ると雨が降り、
 雨が降る日に見たらしい
 むかしの夢を思ひ出す。

ほほじろ

み山頼白鳴くことに、
一筆啓上つかまつる、
故郷^くを出てからまる二年、
まめで其方^{そなた}も居やるかと、

つひぞ忘れた事もない、
風のたよりにことづてて、
木の實草の實やりたいが、
お山の鳥の世わたりは、
春の彼岸が來てからは、
雛のそだてに忙しうて、
ひまな日としては御座らない。

猿の喰逃げ

お山の猿はおどけもの、
 今日も今日とて店へ来て、
 胡桃を五つ食べた上、
 背廣の服の隠しから、
 銀貨を一つ取り出して、
 釣銭はいらぬと、上町の
 旦那のまねをしてゐたが、

銀貨は贋にせの人だまし、
 お釣銭のあらう筈がない、
 おふざけでないと言つたれば、
 帽子しやっぽを脱ぬいで、二度三度
 お詫び申すといふうちに、
 背廣の服のやぶれから
 尻尾しっぽを出して逃げちやつた。